ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

# ソンコ de ソンコ

Vol.135

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

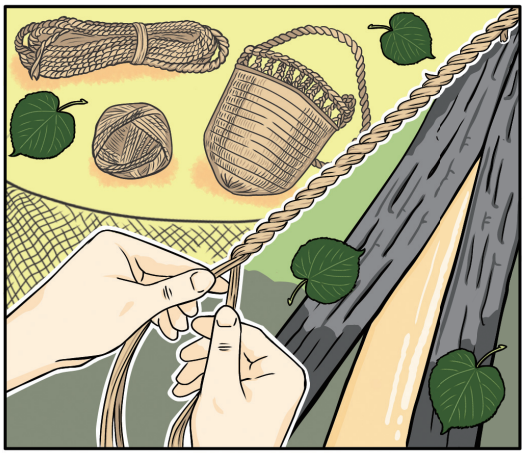
## ニペシニ(シナノキ)

本田優子(札幌大学教授)

アイヌ文化でとても重要な木の一つがシナノキ。毎年、授業でこういうやり取りをしています。「シナノキってどんな木かわかる人?」⇒「…(無言)」⇒「うちの大学の学生食堂の名前は?」⇒「リンデン」⇒「リンデンってどんな意味?」⇒「…(無言)」⇒「菩提樹(ぼだいじゅ)のことです。食堂の横にある正門からの並木はみんな菩提樹。だから食堂の名前はリンデン。菩提樹の別名はコバノシナノキ。小さい葉っぱのシナノキってこと。つまりシナノキはあの木とそっくりなの。毎日見てるんだからもうわかるでしょ?!」みんなとっても嬉しそうな顔をします。菩提樹もシナノキも葉っぱの形はかわいいし立ち姿も美しい。採れる蜂蜜はすっきりと清浄な味と香りで、私は蜂蜜の中で一番好き。

シナノキはアイヌ語ではニペシニ。ニペシ=シナノキの内皮、ニ=木という意味で、内皮から採れる繊維は強靭なうえに水にも強いの。サランニプ(編み袋)の原料になる他、江戸時代から漁網やロープの多くはシナ皮で作られていました。こんな物語があります。

和人の漁場に働きに行っている人々が、漁に使う縄を作るために山にシナノキを取りに行くが誰も帰らない。私は一人娘なので親から絶対にその漁場に行くなと言われていたが、自分の目で確かめたくて働きに行った。雇い主に頼まれて山に行くと腐ったシナ皮が山のように積まれていた。夜、女神が私の夢枕に立って明日の夜は眠るなと教えてくれた。夜、忍び込んできた化け物を私はつかまえて殺し、腐った皮を燃やした。



イラスト/山丸ケニ

シナノキの繊維ではアットゥシと呼ばれる樹皮布も作られます。現在、アットゥシの原料と言えば、アイヌ文化通の方々はすぐさまオヒョウと言いますよね。でもしばらく前までは、オヒョウよりも圧倒的にニペシで織られていたようで、昭和三〇年代の平取町二風谷では、ニペシアットゥシ製のお土産品が飛ぶように売れたとのこと。けれども現在は、シナノキもオヒョウも入手困難なうえ、後継者不足も深刻です。

北海道だけでなく東北でも「しな布」と呼ばれるシナノキの織物が生産されていて、鶴岡市(山形県)や村上市(新潟県)の山間部で産出されています。アットゥシと同じ課題を抱えているようですが、最近、若い後継者が現れたという嬉しいニュースも。しな布もアットゥシもどうか次世代に継承されますように!

J

次回のテーマは「ウポポイ開園3周年」
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。